# 表紙の解説 日本で最初の眼科専門医―馬島清眼と馬島流について―

## 谷原秀信



図1 馬島流1世 清眼僧都像 醫王山薬師寺(後年,明眼院へと発展する)を 再興し,馬島流眼科を創始したといわれてい ます。現在も明眼院に所蔵されています。

#### はじめに

わが国の開闢以来. 数多の眼科医がこれまで 活躍してきました。その中でも、多くの歴史家 が、日本眼科の歴史を通じて、「最初の眼科専 門医」として認識しているのが、今回、表紙に 掲載された「馬島清眼(まじませいがん)」(図 1)です。日本眼科の源流を遡っていくと、多く の歴史家による医学史研究が到達するのが、最 古かつ最高権威であった馬島流です。本シリー ズの前回「戦国武将の眼病事情」でも、 馬島流 の眼科医たちが、幕府や近世大名の眼科診察を 担当していたことに言及いたしました。江戸期 を通じて、馬島流の盛名は全国に広く認識され ていたようです。しかし、馬島流の流れを遡及 していくと、江戸期はおろか、それよりも遙か 以前にまで辿ることができます。そこで、今回 は、日本眼科の中でも最高峰とみなされた馬島 流について、創始者である清眼僧都から始めて、 その継承と日本医学史に与えた影響を解説して みたいと思います。

# 「日本二於テ眼科専門醫ト伝レル確実ナル者」

日本眼科に関連する詳細な史料渉猟に基づいて執筆された小川剣三郎の「稿本日本眼科學史」(吐鳳堂書店、明治37年)において、「日本ニ於テ眼科専門醫ト伝レル確実ナル者ハ、本邦眼科ニ於テ尤モ有名ナリシ馬島流ノ流祖ナル清眼大僧都ナリトス」と論考されています。この「清眼大僧都」が、今回のテーマである馬島流の創始者(第一世)の馬島清眼のことです。

小川剣三郎を含めて、日本眼科史を研究した多くの歴史書においては、醫王山薬師寺(尾張国馬島村)の坊頭である蔵南坊の馬島清眼を第一世とする馬島(馬嶋)流を日本の眼科における源流とみなすことが共通認識となっています。たとえば、江戸期初期(17世紀)の漢方医であ

る黒川道祐が執筆した医学史書「本朝醫考」に おいては、「本朝目醫、其家伝者多、特推-間 島良峰- として馬島流を筆頭に挙げており. 次いで「其外佐々木、青木、須磨、穂積」の名 を並べています。筑前高田流とその流れを汲む 田原流、諏訪の竹内流、讃岐の三井流などの流 派も有名でしたが、歴史の長さとともに、その 後の眼科診療の伝播を通じても、最高権威者と しての「馬島流」の一続が隆盛を誇っていたと 考えられます。上記の小川剣三郎「稿本日本眼 科學史」でも、「近世史」の章では、筆頭に馬 島流が挙げられています。さらに、富士川 游 「日本醫学史」(日進書院、昭和16年)の「室町 時代ノ醫学 眼科 | の章においても、「所謂馬 島流眼科ヲ興セシハ吉野朝時代ノ中葉ナリ。コ レヲ我ガ眼科専門醫家ノ嚆矢トス」と記載され ています。

## 馬島流の起源

尾張国海東郡馬島村に、眼科診療が始まった ひとつの契機は、最澄の弟子であった聖円が、 延暦 21 年 (802 年) に「五大山安養寺」として 開基したことにあります(ただし、その信憑性 については、若干の議論があります)。その後、 延文2年(1357年). 戦乱によって荒廃してい た寺院が、上記の清眼僧都によって、醫王山薬 師寺として再興(中興開山)されたと伝えられて います。したがって、寺院の由来の信憑性はさ ておき、14世紀の清眼法師が実質的な創設者で あるという歴史的事実は間違いないようです。 清眼法師が荒れ果てたこの寺院を再興するとと もに、おそらくは再興した寺院の経済的基盤を 構築するために、眼科診療を開始して、絶大な 声望を誇ったと推測されています(福島義一 「眼科史」)。

この寺院は、後年、後述するように「明眼院」という名称を授かり、愛知県海部郡大治町

にある天台宗寺院「明眼院」として現存してい ます。明眼院の縁起文に記された伝説に曰く 「清眼僧都の夢に薬師如来が現れて. 医道を授 けた」とのことです。あるいは一説には、「異 邦人に会って、眼科の奇書を得た夢を見た | と する文書もあります。いずれにせよ、このよう な神秘的な起源伝承は、宗教医学(あるいは祈 祷的な医療) において時にみられるものなので すが、診療行為に対する神秘的な権威づけであ ると理解するのが妥当でしょう。 当時の僧職は、 相対的に高い教育レベルにあり、大陸からの渡 来人との交流や書籍の輸入によって、 国際的な 最新情報の最初の受容者となることが多く. 医 学においても同様だったと考えられます。実際. 現在においても多数残されている馬島流文書の 多くは, 当時の中国医書の記載内容と共通する 用語・概念が多く、多くの歴史家が、中国医学 の流れを汲むと推定しています。したがって. 当時. 輸入された中国医書を読み解くことで. あるいは渡来人との交流の中で、清眼僧都が、 それを理論化し実践する馬島流を創始した. と 考えるのが妥当な推量であると思われます。

清眼僧都は、康暦3年(1381年)に入寂(死去)したと伝えられています。この清眼僧都が、馬島流開祖(1世)となる馬島清眼であり、その後、綿々と系統が継承されていきます。ただし、馬島流においては、上記のように、天台宗寺院における系譜の継承がなされましたので、血縁による一子相伝ではなく、基本的には僧侶の師弟関係による継承であったようです。なお、馬島流に限らず、当時の技術継承、特に医療関係では、口伝や秘伝書によって、(表向きは)厳格に情報の流出を統制することが普通であったようです。

## 馬島流の諸流派とその隆盛

しかし歴史的な事実としては、師弟関係や一



図2 「尾張名所圖會」に描かれた明眼院

「尾張名所圖會」は、江戸後期から明治初期にかけて刊行された尾張 (現在の愛知県西部地域) の名所を図説した書籍です。明眼院の鳥瞰図が記載されています。

子相伝の情報統制は厳格にはなされず,馬島流には,多数の分派が発生しています。馬島流文書には,五流五家の諸流派の名が残されております。特に,同じ尾張国の馬島村に眼病治療所を設置していた大智坊との相剋は,かなり深刻な本家争いへと発展しました。江戸期に,尾張藩の裁決を受け明眼院(蔵南坊)系が勝訴したことで,明眼院(蔵南坊)系が本流として収斂されていきました。しかし大智坊系は,積極的に流とで、明眼院(蔵南坊)系が本流として収斂されていきました。しかし大智坊系は,積極的に馬島村を離れて地方進出していたといわれ,流派としての統制がますます難しくなっていたと思われます。しかし,これらの過程を通じて,眼科診療が全国に波及し,それとともに馬島流の盛名はさらに高まったと考えることもできるかもしれません。

馬島明眼院系の継承者の中で、特に有名なのが、13世圓慶であるといわれています。後水尾天皇の娘、三ノ宮を治療したことで、天皇から「明眼院(みょうげんいん)」の寺号を授けられました。したがって、「馬島明眼院」とは、この時点以降の名称であり、それ以前は、醫王山薬師寺蔵南坊というのが正しいと考えます。この「明眼院」の号は、涅槃経に「金鎞は膜を割き明眼を開く」という一文があることに由来するのだそうです。馬島流の隆盛は、以後も続き、21世圓海僧正は、桃園天皇の娘、二ノ宮を治

療し,「勅願所」の名誉を賜りました。さらに, 幕末期には,28世である圓如僧正が長崎に遊学 して,西洋(オランダ)医学を習得して,さらな る発展を遂げました。

幕末・明治期に至っても衰えることはなく, 天保の四大眼科の筆頭に挙げられ,「馬島,田原,諏訪,土生」と続くことが文献に残されています。当時作成された「尾張名所図會」には,この明眼院の素晴らしい鳥瞰図が描かれています(図2)。その庭園は,名園のひとつに数えられており,江戸初期の作庭の最高権威といわれた小堀遠州の作であり,遠州自身も晩年には眼病の治療を受けたと伝えられております。後小松天皇や後水尾天皇の御宸翰,円山応挙,狩野探幽,小堀遠州,夢窓国師などの文筆・絵画,仏像などの膨大な数の宝物が寄贈・所蔵されていました。

#### 近代における馬島流眼科の継承

現在においても、寺院としての明眼院(図3)と眼科系譜としての馬島(馬嶋)家は、連綿と継承されています。馬島(馬嶋)流37世となる馬嶋慶直(藤田保健衛生大学名誉教授)と馬嶋昭生(名古屋市立大学名誉教授)の兄弟に至り、慶直の嫡男も眼科を継承しているので、今後も眼科



図3 現在の明眼院(愛知県海部郡大治町)の境内明眼院の本堂や客殿に通じる入口の仁王門で、塗り替えられたばかりの新しい柵は美しい朱色です。その奥には、昭和34年(1959年)の伊勢湾台風での損傷が甚大のために解体された立派な本堂や客殿が聳え立っていましたが、解体後現代風の小さい本堂が新築されています。明眼院敷地内で、かつて眼病診療所があった場所には、「馬島明眼院診療所跡」の石碑が36世清則により設置されています。

医の系譜として続いていくものと思われます。 ちなみに、「馬島 | 流の現在の名字が「馬嶋 | であることについては、前述の分派問題や漢字 の当て字以外の事情があるのかもしれません。 そもそも馬島流は、 妻帯しない厳格な仏教の系 統ですから、親から子への一子相伝ではなく、 師匠から弟子への継承の形をとらざるを得ませ ん。実際に、32世圓彰までは、門弟への継承で あったと思われ、明治政府によって、"僧医" が禁止されたため、33世の則安が医師免許証を 得て、それ以後は、血統による系譜となります。 したがって当世の馬嶋家に血統として追えるの は、33世馬島則安から現代までであり、則安の 娘、糸の婿養子となった順吉が34世を継ぎま した。この順吉の代で、「馬島」家は、「馬嶋」 家へと用いられる漢字が変わっているのですが. その後、則安に男子、宏文(則一)が誕生したこ とで、35世当主は「馬島」則一へと譲られまし た。しかし、則一は後に内科医となって(名古 屋市で)開業したため、「馬嶋」順吉の長男、馬 嶋清則が36世を継ぎ、その後、上記の37世馬 嶋慶直に至ります。

筆者(谷原)は馬嶋昭生から、馬島家の婿養子 となって当主を継いだ順吉は、僧医禁止後の診 療や家族の生活にも便利と考えたのか、大治の 地を離れて馬島流眼科を再興し新しい一家を興 すという意を込めて大治の地を離れて名古屋市 東区富士塚町に「馬嶋明眼医院」の名称で洋風 2階建ての有床眼科診療所を開設したことから も、大正9年(1920)の第1回国勢調査の際に、 あえて「馬嶋」の字を用いたのではないかとい う推測もできると聞きました。この診療所は昭 和20年3月の米軍機B-29による名古屋大空 襲で焼失しましたが、昭和2年に36世を継承 していた長男清則は半焼した隣接する病棟の一 部で診療を続け、敗戦後に診療所を再建しまし た。しかし清則の没後は、上記の場所に「馬嶋 明眼医院」という名称の眼科診療所はなくなっ ているということです。

# 馬島(まじま)流の名称について

馬島流の諸流派は、多数の文書を残しており、 また馬島流の眼科医による診療活動については. 自他による多くの記録が残されています。本シ リーズで、前回題材として取り上げた細川忠興 の書簡もその一例です。しかし、これらの史料 において、馬島流の「まじま」という名称の表 記には、「眞嶋」「馬島」「馬嶋」「間島」「麻島」 「馬嶌」「摩島」などの多数の同音文字が使用さ れていることに気づきます。一般論として、古 文書での名称表記では、必ずしも漢字表記が厳 格ではなく、「まじま」という音に当てること ができれば、さまざまな漢字が使用され、文献 に記載されることで、それが継承されてしまっ た可能性があります。当事者ですら、そのよう な感覚であるところに、細川家文書のように、 患者側の記録では、厳格な名称使用を遵守する 必然性は、さらに低いであろうと思われます。 それに加えて、事情が複雑であるのは、厳格な

師弟での伝承、もしくは一子相伝であったはずの馬島流ですが、その後、多数の分派が生じており、本流である明眼院(みょうげんいん)系以外の分派の文書には、「馬島」以外の当て字が多い傾向があると論考されています(「大治町史」)。また附言すれば、当時の医療が、厳格に統制されていたわけではなく、正式に習得した「明眼院」系の馬島の門弟外にも、勝手に僭称する者もいたであろうと推測されます。いずれにせよ、尾張の地名であった「馬島/まじま」の名が、流派の名称として流布していったと考えられます。

## 馬島流文書について

馬島流文書は多数残されています。馬島流文書とされる文献の実存が確認されているのは、小川によると、16世紀半ば永禄・天正年間を最古としており、列挙された数は、小川「稿本日本眼科學史」では28種類、「大治町史」では84種類が挙げられています。現在、財団法人研医会研究所に所蔵されているだけでも55種類があるそうです(中泉行正「古医書をたずねて」)。しかし、その多くが特に重要な技術的な部分については、口伝・秘伝とされ、記載されていません。また固く刊行を禁じられていたことから、知識の伝播を著しく抑制しており、独自の発達は阻害されたものと考えられています。

馬島流文書にみられる眼疾患の理解は、基本的には、(仏教用語や地水火風などの)古代インド学説や(陰陽五行説などの)中国医学説を基盤としたもので、日本独自に付け加えられたものはきわめて少ないと推定されています。東京大学眼科の初代教授であり、日本眼科学会初代理事長たる河本重次郎が喝破するには、「予カ見タル所ニテハ、日本固有ノ眼科トテハナキガ如シ、日本ノ眼科史ハ支那ノ眼科史と蘭学以来欧州的眼科進入シテ混合セル者ナリーだというこ

とです(河本重次郎「日本眼科ノ由来及日本ニ 於ケル蘭學ノ本源ニツキ」)。むしろ,日本に輸 入されて後,その思想は簡略化され,寺院によ り興ったために,宗教医学としての色彩を帯び ており,(厳格には守られていなかったようで すが)前述の師弟間での伝承や一子相伝による 口伝・秘伝が多いことにより,長く思想的発展 はみられませんでした。

## 馬島流文書にみる眼疾患の理解と治療

馬島流眼科においては、漢字に並列して和語の記載がみられ、支那医学書で瞳神、瞳子、黄仁などと呼称する瞳孔を人目(ひとみ)、角膜および虹彩を黒眼(くろめ)、強膜および球結膜を白眼(しろめ)、外眼角を眼尻(めじり)などの表現は、既にこの時期に定着していたと思われます。いわゆる「内障(ないしょう)」は、虹彩より内方にある眼疾患の総称で、馬島流文書のいわゆる「ソコヒ」は、中国医書に記載された内障に対応するものです。当時は、眼解剖がきわめて曖昧な理解であり、角膜と瞳孔も明確に分別されていなかったために、おそらくは虹彩・瞳孔面よりも奥の疾患を内障と呼称し、それよりも外(多くは角結膜疾患)を外障(ウワヒ)としたと推定されています(福島義一の説)。

小川剣三郎が断ずるに、「内障ハ馬島氏の眼科ニアリテ最モ重ク視シ所ニシテ、別チテ血内障, 石内障, 黄内障, 黒内障, 青内障, 白内障, 赤内障ノ七種トセリ。其黒ト云ヒ, 其青ト云ヒ, 其黄ト云ヒ, 其白ト云フハ, 皆瞳孔ノ色澤ヲ見テ名ヅクルモノ」と記載されています。内障に加えて, 膜目(マケメ), 血目, 肉目, 星目, 打目, 突目, 腫物, 痘疹, 倒睫, 風眼, 外障で,以上にて馬島流の十二證と言われています。白内障は, 現在においても使用されている用語であり, これは上記の五色のうち, 「白」の内障, すなわち「シロソコヒ」に概ね対応していると

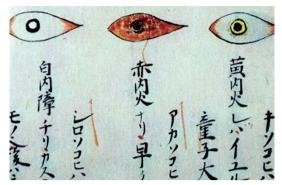


図4 古文書「眼目明鑑」に記載された眼病の名称白内障(シロソコヒ)は、肉眼的にも視認できる成熟白内障の外観に合致するように見えます。「眼目明鑑」には、「内障(ソコヒ)ハ、青、黄、赤、白、黒ノ五色ナリ」と記載されています。疾患の名称は、文書によっても多彩です。

推測できます。また石内障と青内障が現在の緑内障に近い疾患概念とみなされていますが、厳密な対応ではあり得ません。なお初めて刊行された眼科専門書である「眼目明鑑」において曰く、「内障(ソコヒ)ハ、青、黄、赤、白、黒ノ五色ナリ。内障ノコト、其症多シトイエドモ、大概白黒ノ花散乱シ、或ハ針ヲ以テ刺スカ如ク、霞、濁ヲ生ズルモノ皆内障ノ漸ナリ」とのことです(図4)。

馬島流文書に記載された治療内容には、内服、 点眼、洗薬、塗薬、かけ(掛)薬、膏薬、散薬、 丸薬、煉薬があり、龍脳、麝香、石膏、真珠、 辰砂、塩石、光明丹、黄丹、虎胆、虎肉、鹿石 (鹿の角)、夜毛(猫の毛)、牡蠣(牡蠣の貝殻)な どきわめて多彩なものが含まれます。一方、手 術療法としては、あつ金、はさみ、切かま、切 はさみ、目棒、白内障針(鍼)などがありました。 特に、秘伝として重要視されたのが「ソコヒ

に針をたつることあり」と記載され、その詳細を口伝とした白内障手術と考えられています。針(鍼)でもって、水晶体を硝子体側に突き落とす墜下法、針を用いて水晶体嚢を切開する截開法、水晶体を破壊して吸収させる破壊法などの手法を示すものです(福島義一「日本眼科史」)。

#### おわりに

眼科の源流を探すべく. 今回は. 馬島流を中 心に記述させていただきました。馬島流の系譜 は. 14 世紀に始まり. 37 世代を連綿と継承しつ つ、全国の眼科診療に大きな影響を与えつつ、 現在に至ります。その後、全国に眼科の名家と 言われる流派が派生していきます。学問体系が, 師弟関係や血統を基軸として引き継がれながら、 馬島流の当主たちを含めて、これらの諸流派の 眼科医たちが、江戸期の後期において、医学の 進歩、特に海外からの近代眼科学の勃興とその 日本への輸入による昇華を遂げていく過程は. 非常に興味深いものです。さらに明治期になっ て、ドイツ医学を中心とした西洋医学が輸入さ れるにあたっては、これら諸流派の流れを汲む 眼科医たちが、驚く程柔軟に西洋医学の最新情 報を受容していったことが、本シリーズを読ん で頂くとわかります。そして、諸流派の閉鎖的 な情報統制によって継承されてきた学問体系は. 帝国大学を中心とした. 開かれた教育体系が全 国に展開され、その後、日本眼科学会とその関 連研究会が、全国に設置され、実験医学の哲学 が普及していったことで激変します。その経緯 の中、閉鎖的な継承や過剰な権威づけが科学の 進歩を抑制するという事実を示唆する多くの事 例を認識することができます。

眼科医としての人生において、若い頃には、診療技術の修得や研究で多忙な毎日を過ごす中で、眼科の歴史には、なかなか興味を持てないかもしれません。しかし、長い眼科医人生の中では、長い時間軸を俯瞰して、先達がどのような形で今日の近代眼科学へと到達する道筋を切り開いてきたのかを知っておくことも、無駄ではないと思うのですが、読者の皆様のご感想はいかがでしょうか?

(謝辞 本調査においては、名古屋市立大学

名誉教授 馬嶋昭生先生, 大治町教育委員会社 会教育課 櫻田純子様, 研医会図書館 安部郁子 様, 中泉行弘先生, および熊本大学名誉教授 岡村良一先生のご助言とご支援を賜ったことを 深謝致します。また本文中は, 歴史的な事実を 扱っていることから、歴史的人物に加えて、御 存命の先生についても、あえて敬称を省略させ ていただきましたことをお断り致します)

〔谷原秀信:熊本大学大学院生命科学研究部 眼科学分野〕

\*